

プラーク学派の言語文化論と言語のノルムからみた 書き言葉と話し言葉について

その他のタイトル	Über die geschriebene und gesprochene Sprache in der Prager Sprachkultur- und der sprachlichen Norm-Theorie
著者	十河 健二
雑誌名	独逸文学
巻	36
ページ	80-98
発行年	1992-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018280

プラーク学派の言語文化論と言語のノルム からみた書き言葉と話し言葉について

十 河 健 二

「民族的特性を極めて顕著に表現する二、三の語は国民的の音色をもつものであって、最善の翻訳者といえどもその真を写しだすことは困難であり、場合によっては、積極的に不当不正を加えることさえなきを保し難い」¹⁾。新渡戸稲造のこの言葉は翻訳が如何に大胆で、かつどれだけ細心の注意を要する作業であるか知らしめ、また、翻訳が不十分であれば、受け入れる方の言語世界に浸蝕がおこる恐れをも懐かせる。

一方の言語で表現されたものを他方の言語で忠実に再現させることはしばしば困難である。翻訳の作業を困難にするものは個別言語の表面上の難しさ（発音、文字や文法）よりも、むしろその言語のノルムであろう。というのは個別言語は言語のノルムによって初めてその所有者と有機的に結びつくからである。有機的とはすなわち、人体と臓器の関連性に通ずる。生命が維持されるためには、ただ一つの臓器の欠損も許されないのと同様に、個別言語と人間とは切っても切れない関係にある。新渡戸稲造は言語学上のこのような概念を知らなかったであろうが、それに相応するようなものはそこはかたく感じていたに違いない。言語のノルムにより個別言語とその所有者は様々な面で結びつけられるのである。「言語生活」は両者の関連を総括する表現であり、「言語文化」は言語生活の様式を問題にするのである。

さて、われわれの言語生活は言語の視覚的刺激および聴覚的刺激を除いては語ることができない。すなわち言語の書き言葉、話し言葉の形式である。しかし、一般に言語研究といえば、直ちにこれら2形式の区別には関連しない研究か、あるいは主に話し言葉を前提とする言語活動を念頭に置いた研究が容易に思い出されるであろう。

われわれの言語生活は日々展開する。しかしながら、話し言葉および書き言葉それぞれの役割をよく識別しなければ、言語生活の健全な向上は望むべくもない。使用形態の偏重あるいは混同は言語生活の破綻を招くであろう。言語共同社会の構成員はそれぞれに両形式の使用を十分に会得すべきである。その意味で、書き言葉の社会学的な研究をけっして疎かにはできない。ところが、近代言語学では、より自然的な存在物を重視するあまり、書き言葉の考察に、概して比重が置かれなかったといわれる。しかしながら、話し言葉を重視する特性はなにも近代言語学に始まるのではない。その根源を探ろうとするならば、元来、口頭による言語活動の方がヨーロッパでは主流であり、遠く古代ギリシア・ローマの時代からすでに、人々が街頭で聴衆を前にして論理的に弁舌を振るっていたことを思い起こさなければならない²⁾。

そして、話し言葉を尊重する傾向はやはり、19世紀末になって顕著になる。ベハーゲル (O. Behaghel) にさえも、書き言葉は話し言葉に比較して「単調で、形が一様で、古臭く、馴染めない考え方で形成されているように思えた」³⁾ のである。当時の言語学者にとって、言語とはまず話し言葉の形式だったのである。このようなことを考慮すると、ソシュールの二分論、コセリウの三分論に接して、話し言葉の形式をすぐに思い浮かべるのは論者だけではなからう。

さて、本論では言語のノルムの理論にとって不可欠の三分論を取り上げ、コセリウ (E. Coseriu) の三分論に匹敵する理論が、すでにプラーク学派で展開されていたことを、明らかにする。同学派の論考でもコセリウの場合と同様、言語のノルムが重要な役割を果たすのである。そこで、順序として、プラーク学派の「三分論」の解釈に際して、再びプラーク学派の言語文化論そして機能的観察に言及する⁴⁾。それは、プラーク学派の「三分論」が言語文化論を土壌にして語られるからである。次いで、同学派の「三分論」はやや考察の余地があると思われるので、コセリウのそれを援用して、新たな関連体系を示すことにする。これにより、書き言葉・話し言語の両形式が等しく言語文化論で重要な位置を占め、言語生活に共に不可欠であることが、判然とするであろう。

ところで、ようやく最近になってその研究の全貌が明らかになりつつあ

ると言われ、そして、その研究の先見性がしばしば賞賛されるのが、マテジウス (V. Mathesius) である⁵⁾。これはしかし、マテジウスに限ったことではなからう。本論ではマテジウスの高弟であり、プラーク学派の「三分論」を展開させたヴァチェック (J. Vachek) を主に取り上げる。

1) プラーク学派の言語文化論

クラウス (J. Kraus) はプラーク学派の言語文化に関する研究を「社会言語学への重要な貢献」と評価している⁶⁾。言語文化論は1930年代、ハヴラーネク (B. Havránek) とその弟子によって展開を見ることとなる。ハヴラーネクは標準語と言語文化論の指導的な立場にあったのである。これよりさき、1920年代及び1930年代の初頭のソヴィエトでは、経済の発展に伴い、社会構造や社会意識の変化につれて言語も変遷する、ということが既に見抜かれていたのである⁷⁾。

1939年ドイツ軍はプラハに進撃した。プラハ大学の封鎖により、プラーク学派の活動は麻痺してしまった。くわえて、プラーク学派の創設者であり、重鎮であったマテジウス (1882—1945) の他界もプラーク学派の活動に重大な影響を与えずにはおかなかったのである。ヴァイゼ (G. Weise) によれば、第二次世界大戦終戦までの空白の時代を境にして、それ以前を古典期と称する⁸⁾。

1950年代及び60年代には言語文化論が非社会主義の国家の研究者に語られることはあった。しかしながら、非社会主義の国家で言語文化の研究がそれほどの発展を見なかったのは、社会言語学そのものの未成熟ということ、および非社会主義の社会言語学的な研究の対象が方言であったり、社会層による言語の変種であったりしたためである⁹⁾。

古典期のプラーク学派は言語文化論の展開に終始していたといっよい。なるほど、一般にプラーク学派の評価では、言語文化論はそれほど関心を集めないが、言語の「機能的観察」を考察する場合は重要である。言語文化論は社会における言語の機能性と文化形成との関連なくしては語れない。そしてヴァチェックの「三分論」に関する論考はプラーク学派の古典期の言語文化論の一つである。

言語文化論が第二次世界大戦後、一時期疎んぜられたのは「言語文化」

という表現自体の一般性が原因であるかもしれない。また、プラーク学派の使用言語が主としてチェコ語ゆえに、国際的に久しく日の目を見なかったことを強調しなくてはなるまい¹⁰⁾。旧 DDR では 1970 年代初頭から、BRD では 1980 年代中葉から言語文化論が注目され始めるが¹¹⁾、それ以前、このような術語は使用されなかったにもかかわらず、言語文化論に相当することを果たしてきたという意見が見られるほどである¹²⁾。

第二次世界大戦後の新生プラーク学派の特性はヴァイゼにより次のように説明される：「新しいプラーク学派の言語学の目標は、古いものと新しいもの、自国のものと国際的なものとを創造性豊かに統合することである。流行に左右されずに、自己の伝統を忘れず、言語と相關関係にある言語外的な実在の世界に注意を払うのを怠らない」¹³⁾。

さて、プラーク学派が、当時の言語学の潮流の中で、他の言語学の一派とどのような関連を持っていたかをみるならば、とりわけソシュール (F. de Saussure) 以降の言語学の他の二つの主流とともに語らなければならない。ソシュールは青年文法学派を克服したが、アメリカ構造主義、言理学派そしてプラーク学派に克服されたのである。ツルンカ (B. Trnka) の援用のもと、ヴァイゼはアメリカ構造主義を記述的で行動主義的であるとし、言理学派に形式を尊重する特性を見出し、プラーク学派を機能的・構造的であるとする。プラーク学派は上記の 2 派と異なって、「伝統にたいして肯定的な姿勢をとり」¹⁴⁾、ソシュールにいわれるラングーパロールの二分論および通時的・共時的な言語観察の受容に難色を示したのである。

このような態度は同学派の『綱領』¹⁵⁾の基本方針とも共通性がある。すなわち、言語を社会生活で発揮される機能体系の一つとみている。機能的視点は、言語を表現行為あるいはコミュニケーションの手段として扱う場合にとられ得る。こうした研究方向は今日の社会言語学の範疇に入るのは明らかである。西ドイツ連邦では社会言語学の発展は 1960 年代といわれるが¹⁶⁾、プラーク学派ではすでに 1920 年代後期にその萌芽がみられるといつてよからう。

1929 年の綱領の採択ではプラーク学派のメンバーが初めて一堂に会した。そこで採択された 10 か条の綱領の中に言語文化に関する定義がみられ

る¹⁷⁾。それによると、プラーク学派の言語文化論は総じて、標準語(Literatursprache)にかんする言語文化論である。この文化論は標準語の使用能力の向上を目的として展開する。すなわち、言語は「特定の目的に使用される表現手段の体系であり」¹⁸⁾、その「表現手段」がどのような場面でどのように使用されるのか、言語生活を向上させるためにはどのような操縦がどの程度行われるべきか、がプラーク学派の関心事だったのである。したがって、言語共同社会の言語生活の向上という視点から、言語文化の最も重要な担い手として、標準語が脚光を浴びる。細分化すると、日常使用の標準語(Alltagsliteratursprache)すなわち話し言葉の形式、文章用語の標準語(Buchliteratursprache)すなわち書き言葉の形式である。これらの使用能力の向上は言語共同社会の構成員の精神生活の表現力を促進させ、共通の文化領域を基盤にした生活を構成員にもたらすのである。

言語共同社会では話し言葉の洗練が文章用語に好影響を与え、それが結局、書き言葉の安定につながる。日常語や文章用語の形式を損なわず、保護・育成し、標準語による的確な伝達能力を向上させることがプラーク学派の狙いである。そしてこれは母語の教育(わが国では国語教育)の目的でもあろう。

さて、プラーク学派の「機能」の解釈をヴァイゼにならって、「生理学からきた、言語学的にはラテン語に基づく語に近似し」、「働き・役目・任務」を表す、と理解したい¹⁹⁾。„Sprachkultur“の定義では言語の働きを良く理解し、その役目を知り、その任務を熟知するという言語使用者の課題を明らかにさせるために、„Bemühungen“という表現がされている。当然それは言語共同社会の構成員全員に求められるもので、言語学者ならば言語文化の発展に科学的根拠を与えることであり、その他の構成員にとっては、すくなくとも言語文化の向上に沿った言語生活が求められるということである。

機能的観察を発展させたプラーク学派で、その「機能」が正確に定義されなかったのは言語学のパラドックスであろうか。とはいえ、あるものの中心的なことがらが常に成文化され、定義されなければならないということはない。かつてわが国の精神的基盤であった、武士道が成文化されていなかったことは新渡戸稲造により明らかである。かえって、成文化されな

いほうがその存在を強く意識させるといえる。

『綱領』そして『言語文化の特性の概要』(*Allgemeine Grundzüge der Sprachkultur*)の起草に携わった人々は標準語の硬直化を求めていない。定着化を論じつつも、その背後に潜む言語生活の貧困化の危険性を承知している。生命あるものの間断のない変化(あるいは成長)と同様、言語自体は常に変化をする。1920年代に起こったチェコ語の浄化運動に対してプラーク学派が反対した根拠を言語生活の貧困化への洞察に見ることができよう。

ハヴラーネクはノルムの両面に言語の一对の特性をみている。すなわち、発展性を言語のエネルギー、安定性を言語のエルゴンに関連づける²⁰⁾。言語使用は他者に理解されることを前提とする。これは精神的・生理学的な力がある初めて可能である。この意味で、エネルギー(ハヴラーネクがエネルギー的観察のより所としたイエスペルセン〔O. Jespersen〕では *Energetik*)という表現が使用される。もちろんエネルギーに合目的性は不可欠の条件である。プラーク学派ではこの合目的性に力点がおかれ、機能的言語観察が発展したのである。

こうしてハヴラーネクは、プラーク学派の機能的観察にエネルギー的観察との類似点を見出した。すなわち、「合目的性」を要にしてイエスペルセンではエネルギー的観察、プラーク学派では機能的観察である。ハヴラーネクの「もっと古い世代の言語研究者」(„die ältere Generation der Sprachforscher“)という表現で即座に思い出されるのはエネルギー的言語観察の祖フンボルト(W. von Humboldt)である。BRDではエネルギー的観察が今世紀になって新フンボルト学派を中心に非常に発展を見せた。

プラーク学派では前述のハヴラーネクのように、エルゴンの・エネルギーの側面を認めるのに対して、ヴァイスゲルバー(L. Weisgerber)はフンボルトの1830年の言葉:「言語はエルゴンではなく、エネルギーである」を忠実に受け継ぎ、言語の精神世界の認識から中間世界の構築へと進んだのである。ヴァイスゲルバーの „die sprachliche Gestaltung der Welt“ という表現は中間世界の存在を示唆するものである²¹⁾。言語の中間世界は言語共同社会の構成員の個人の言語活動の結果ではなくて、あく

まで、言語共同社会という単位で考えられる活動の結果である。したがって、個人の言語生活よりも集団の言語生活のレベルで考察されなければならない。

プラーク学派は、その活動から、所有者の精神面への言語の影響を対象とするのではなく、効果的な言語社会の発展を目指して、言語の機能的観察に長ずる、といえる。その際、言語使用は集団的あるいは個人的にも考察され得る。言語を口頭による表現行為の複合体 (Komplex) とのみ見なすのは、過去の時代である²²⁾。この一方で、ヴァイスゲルバーは「言語を、他のすべての精神的な行為に至る鍵と認めて」²³⁾、精神科学的に言語使用の考察を展開する。

2) プラーク学派にみられるソシュールの二分論の克服

コセリウはソシュールの「ラング-パロール」の二分論に異論を展開し、「体系—ノルム—話」の三分論を打ち立て、ソシュールの二分論を克服した。1952年のことであった。コセリウの働きで、いってみれば言語学の聖域にあったソシュールの二分論は、言語の本質を研究する普通の分野に下り立ち、また多分にみられる社会学的な特性は、後世の社会言語学の伏線ともなったはずである。

しかし、プラーク学派の一員のヴァチェックによってコセリウより早く、言語のノルムの理論でソシュールの二分論が克服されていた事実を見逃すことはできない。それはまた、考察を重ねるにつれ、コセリウの三分論に匹敵すると思われるだけになおさらである。プラーク学派のこの事実はコセリウの著書 „*Sprachtheorie und allgemeine Sprachwissenschaft*“ (1962) (邦訳『言語体系』[1981年]) で言及されていない。これにはプラーク学派がその歴史の長さにもかかわらず、あるいはすでに述べたように言語的条件が負の方向に働いたのかもしれない。

1939年既にヴァチェックは言語共同社会にそれぞれ口頭表現 (Sprech-äußerungen) と文字表現 (Schriftäußerungen) という言語の使用形式が補完的な関連を保ちつつも、それぞれに独立性を損なわずに併存することを論証した。言語研究の先見性はマテジウスだけでなくヴァチェックにもみられるのである²⁴⁾。

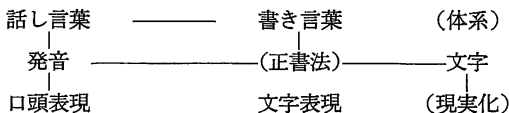
『綱領』にも認められるように²⁵⁾、言語の現実化の形式は口頭による場合と文字による場合に大別できる。したがって標準語は言語共同社会の構成員によってこの二つの場合で使用されるべく研究されるのである。そしてヴァチェックは後者の場合の言語使用を重要視した。もちろんそれは、言語共同社会に話し言葉のノルムと書き言葉のノルムとが併存するということを承知してのことである。重要視とはいえヴァチェックは偏重の態度をとらない。一種の平等性がブランク学派全般の特徴である。

ヴァチェックが文字表現の体系に取り組みだきかけは、アルティモヴィッチ (A. Artymovyč [1932年]) の言葉「いわゆる書き言葉はどれであれ、部分的に話し言葉に依存し、その文字は独立した体系を持つ」²⁶⁾である。そして文字あるいは文字表現の機能を解明しようとする。

アルティモヴィッチが文字に着目したのは、元来ロマン主義的であった近代言語学の中では、画期的なことであったと思われる。近代言語学がロマン主義という思潮を背景に発達を見せ、それゆえに自然的なものに、すなわち方言や俚言に価値を認めていたからである。すなわち、付加物としての文字の体系である書き言葉を論じたこと自体、ソシュールを語らずにはおれない近代言語学の弱点を補うようなものであった。

そして、ソシュールに対抗したアルティモヴィッチの理論をヴァチェックは手掛かりにして、「書き言葉」と「文字表現」、また「文字」とを峻別したのである。すなわち、文字表現は書き言葉の現実化であり、文字は口頭表現を固定化するために存在し、「文字」は図式的な記号の総体と呼ぶための言葉にすぎないのである²⁷⁾。

したがって、口頭表現は話し言語の現実化であり、発音と文字とが同一のレベルに位置する。発音と文字との橋渡しの役目を担うのが正書法である。ここで、次の様に縦横の関係を表すことができる。



「口頭表現を固定化するのが文字である」という説明、およびこの図の「正書法」の位置から言文一致の原則が連想される。言文一致はしかし、実際上は困難な問題である。

ヴァチェックは1939年「書き言語はノルムであり、もっと良くいえば、共同社会でノルムとされる、図式的な（あるいは類型的な）手段の体系である」と定義する²⁸⁾。

ヴァチェックは書き言葉を、文字表現の現実化を可能ならしめるノルムとみなす。書き言葉と話し言葉の相違を無くし、できる限り一様にしようという言語共同社会の構成員の意思が言語変遷の要因として挙げられる。しかし、その意志はつねに達成されるとは限らない。このような言語の変遷に関連する論述では次のように述べる：「書き言葉とラングとが併存する概念であり、その下に文字表現と口頭表現とがくる、という結論に達した」²⁹⁾。つまり、ヴァチェックによればラングは話し言葉の範疇に属する概念であることが明らかである。しかし、コセリウでは「ラング」の概念自体が「パロール」の概念とともに、人間の言語活動を周到に表現するには不十分であるとされる³⁰⁾。したがって、コセリウのいう「体系」を話し言葉と書き言葉の上位概念とするのには魅力がある。

ヴァチェックが書き言葉をノルムの一つとするならば、話し言葉にも同様の資格を与えることができる。ここで認められる二つのノルムの基本的な相違は若干ある。一般に書き言葉と話し言葉とを比較した場合、保存・再生の点で後者は前者に遠くおよばないが、日常の言語生活では書くより話す方が多く、情報を得るにしても、読むより話す方が簡便で、手間も省ける、という利点を動かすことはできない。職業的な専門語であれ、隠語であれ、まず話し言葉の形式で確認されるのが一般的であろう。

このような背景から、ソシュールやそれにコセリウですらも、話し言葉の形式に重点をおくか、もしくは、「言語使用」を論ずるにあたって、話し言葉の形式を最初に念頭に置いたとしても、なんら不思議なことではない。コセリウの用いる「話」には視覚的な要素はほとんどない。コセリウは著書『言語体系』でノルムの存在をまず音韻論の分野で論証する一方³¹⁾、ヴァチェックはこの両者と違って、話し言葉と書き言葉の形式を同等視し、三分論の構成を目指したのである。

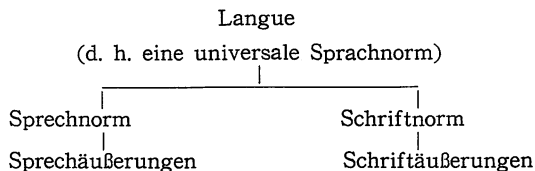
ヴァチェックはそこでソシュールのいうパロールの概念の解体にとりかかった。ソシュールがおこなったパロールの説明でヴァチェックが目じたのは、「言はどのようにして現れるであろうか？それは人びとのいうこ

との総和であって、つぎのものを含む：a) 個人的結合、これは話すものの意志に依存する。b) おなじく意志的な発声行為、これはその結合の遂行にとって必要なものである』³²⁾という点である。

a), b) の2点についてヴァチェックはおおよそ次のように論駁する。a) で述べられることは個人的であっても、結合はノルムに従うはずであり、発話者の主観だけがその主役ではない。b) について、ソシユールの発声行為はヴァチェックのいう口頭表現にほかならない。これは個人的で具体的であるから、パロールの概念に属さない³³⁾。パロールに代わってヴァチェックではこうして、「口頭表現」、「文字表現」という2種の現実化の形式が重要な役割を果たすのである。

単に主観的にだけでなく、言語の客観的な一定のノルムの下で個人的結合が起こるのであるから、そのような結合はラングに属する、というのがヴァチェックの見解である。もちろん、個人的結合は発話者あるいは書き手の意思がなくては成立しない。ソシユールのように個人的結合がパロールに属する、あるいは、ヴァチェックのようにラングに属するというのはどうか。個人的結合には、それ自体、すでに発話者あるいは書き手の精神・心理的状态が反映する。この意味で言語外的な条件が明らかにみられるからである。ラングは純粋に言語的なものである。個人的結合はしたがって、言語のノルムそして、多かれ少なかれ成文化された文法の影響下にあるとするのが自然である。

ヴァチェック言語生活における書き言葉と話し言葉とを同様に重要視して、言語のノルムの理論を展開させ、次のような相関図を明らかにした³⁴⁾。



この図から明らかに Langue を eine universale Sprachnorm と言いつ換えることができる。このような同一視は両者に共通した抽象的・視覚的・聴覚的な条件で成立するが、ヴァチェックは他の所で、「言語〔ラン

グ〕は上記2種のノルムの総和を表し、抽象的で普遍的な言語のノルムを表すのではない³⁵⁾という。ヴァチェックがみせるこのような矛盾にはラングとノルムとを峻別しえなかったことによる概念の不明朗さに操られたふしがある。そこで、上掲の図を根底にして、新たな関連体系の提示が必要である。その際、われわれはコセリウの三分論を援用したいと思う。

「ラング」の表現を使用せず、コセリウのいう個別言語の「体系」を採用する。コセリウはノルムについて次のように論述する：「個人は言語の中で自らの表現を創造し、言語を話し、自らの言語活動内に自らの属する共同体の言語の型や構造を具体的に実現させるのである。形式化の最初の段階において、これらの構造は共同体内で単に慣用的・伝統的であり、それはわれわれが「慣用」とよぶものを構成する³⁶⁾。（「慣用」すなわちノルムである。）また：「実際に個人の表現の自由を制限し、また伝統的実現によって定められた枠内で体系によって与えられた可能性を抑制して個人に課せられるもの」で「義務づけられた実現や社会的・文化的制約の体系」であると説明する³⁷⁾。

言語の現実化の様式はもちろん、相手の視覚に訴えるかあるいは聴覚にかである。この両者の選択は言語使用の場面が重要な意味をもつ。単に言語使用者の恣意によるだけではない。このようなことから、書き言葉および話し言葉をノルムを表す形式とするのは納得できる。しかし、ノルムそのものではない。コセリウが論ずるように、ノルムとは制約を与えずにはおかないものである。したがって言語的だけでなく、社会的・文化的な背景をもつ。それに引き替え、書き言葉・話し言葉自体は純粋に言語的であり、コミュニケーションの手段にすぎない。これら両者は何ら、言語使用者にたいして制御力をもたない。したがって、ヴァチェックの1939年の書き言葉の定義、および次に示す1959年の書き言葉・話し言葉の定義を全面的に受け入れることはできない。すなわち話し言葉・書き言葉自体をノルムとする点である。

1959年の定義でヴァチェックは話し言葉と書き言語の機能差を感情の動きの伝達から、このようにいう。話し言葉：「〈普通、時間的な余裕なく〉与えられた刺激に動的に、すなわち、直接にまた即座に反応するのが、言語の話し言語のノルム（die gesprochene Norm der Sprache）の働

きである。このような働きは反応する側にある言語使用者の観察に基づいて、単に伝達だけでなく感情的な面をも適切に表現するのである³⁸⁾」。

書き言葉：「〈普通、時間的余裕があって〉与えられた刺激に、静的に、すなわち、保存の効く、そして容易に見ることができるやりかたで反応するのが、言語の書き言葉のノルム (die geschriebene Norm der Sprache) の働きである。このような働きは反応する側にある言語使用者の観察に基づいて単に伝達を専らとする」³⁹⁾。

ヴァチェックのこのような定義はコミュニケーションの受信者のみを考察の対象にしていることを押さえておかなければならない。はたして、書き言葉で言語使用者は感情を伝えることは不可能なのであろうか。両者の言語の使用形式の伝達能力の特性は顕著である。しかし、書き言葉であっても話し言葉と同様、語の選択や表現様式によって、使用者がその感情を伝えることは、読み手の解釈力と相まって、話し言葉とは別様に可能であろう。

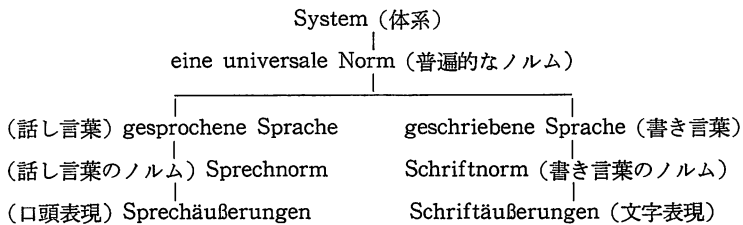
ところで、ヴァチェックは言語の普遍的なノルムに魅力を覚えるが、それは存在の可能性の説明の段階で終わり、明確な概念の形成にまでは至っていない。もしこの当時、後年発展する社会言語学を目の当たりにしていれば、話は変わっていたであろう。

言語の普遍的なノルムの存在をヴァチェックに推測させたのは、言語共同社会内での話し言葉と書き言葉との不等性である。言語共同社会の構成員は話し言葉と書き言葉の能力を同等に修得しているわけではない。また、どの言語共同社会であっても両者のノルムは同一ではない。書き言葉は正書法、話し言葉は発音を通して、相互に移行が可能である。ヴァチェックでは、その結果、話し言葉のノルムと書き言葉のノルムとが近接した状態で普遍的なノルムの存在が推測されるのである。したがって、それはヴァチェックに話し言葉と書き言葉のノルムを下位概念とするものとして現れるのである⁴⁰⁾。

言語が社会生活の多種多様な場面に即応して使用される限り、また、言語共同社会の構成員のおよそあらゆる活動分野が言語使用を基盤とする以上、ヴァチェックのいう言語の普遍的なノルムを両者のノルムの近似性を含めて、さらに社会言語学的に説明することは可能であろう。個人の言語

活動は口頭であれ、文字を使用する場合であれ、これらの区別を超越した使用条件が常に与えられる。ヴァチェックのいう言語の普遍的なノルムは言語共同社会内で客観的な存在であり、言語使用に際して、現実化の二つの形式の選択にすら関与することができる。さらに、方言か標準語かの使用の選択にも影響力を行使することができる。したがって、ヴァチェックのいうように、言語の普遍的なノルムは話し言葉と書き言葉とを下位概念とし、また、その他言語共同社会内で部分的に勢力範囲を有する各種の言語のノルムをも従え、言語共同社会内で最上位に置かれるといえよう。

さて、コセリウは言語活動のあらゆる分野にノルムの存在を予測し、論証している⁴¹⁾。したがって、ヴァチェックで問題にされる、話し言葉と書き言葉の形式にもそれなりのノルムが存在してしかるべきである。このようなことを考慮して、言語の現実化に際して、次のような関連図がヴァチェックの図から可能であろう。



これはヴァチェックが明らかにした関連図の補足修正である。しかし、たんなる補足修正ではなく、話し言葉と書き言葉の系列を併置させることによって、言語生活の成立、言語文化の形成を理解する際に、一条の道筋を得ることができよう。標準語の使用能力では、話し言葉の形式、書き言葉の形式、つまり、既出の日常使用する標準語、文章用語の標準語の使用能力の向上を図るならば、その最初の基本的な認識となる。

時枝誠記氏は「基礎医学が直接に病気の診断と治療とに結びつかない以上にかき離れた理論が、国語政策の根拠とされたことは、国語問題の解決には、まことに不幸なことであったといはなければならない」⁴²⁾と述べて、近代言語学が、わが国の言語学界にはともかく、国語教育の改革に由々し

き方向付けをおこなったことを明らかにした。時枝誠記氏によれば、近代言語学の理論は言語をその使用者から切り離して論じられたために、国語改革のような言語使用の実際を問題にする場合には、はなはだ不適切だったのである。

われわれの言語生活を顧みれば、過去、言文一致の運動が繰り返され、その結果が今日の言語生活の状態といえるが、はたして、そのような状態が言語使用について議論を巻き起こしていないかどうかは、答えの容易な問いである。われわれの言語生活は常に、「国語改革」という問題の解決を迫られているのである⁴³⁾。

最後の関連図は時枝誠記氏の批判を手掛かりにして、氏のいう国語問題の解決、そして国語改革の問題に、また、われわれが直面する言語教育の改善の問題の解決にも、基本的な方向を示唆することができる。すなわち、これらの問題の解決の糸口を看過しないためには、書き言葉と話し言葉が言語共同社会で同等である以上、これら両者の本質的な特性と機能を調査しなければならない。換言すれば、両者の言語形式の相違がわれわれの言語生活を多彩にし、言語文化を発展させるのである。したがって、書き言葉の話し言葉化あるいは書き言葉の崩壊が顕著な昨今⁴⁴⁾、両者の言語の使用形式の言語生活における役割およびその本質的な相違を十分に確認して、それぞれを平等に保護・育成することは、とりわけ社会言語学の課題の一つである。これを意識させるのが言語文化論である。

注

- 1) 新渡戸稲造『武士道』、矢内原忠雄訳、1989年10月15日、岩波書店、27ページ。
- 2) 司馬遼太郎『風塵抄』、1991年、中央公論社、156ページ以降参照。
- 3) Romportl, Milan: *Gesprochene Sprache und Sprechkultur*. In: *Grundlagen der Sprachkultur*, Teil 2, 1982. S.204.
- 4) 尚、拙論、『プラーク学派の言語文化論からみたわが国の外国語教育の改善について』阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』第30号(1988年)での論考と部分的に関連する。
- 5) ヴィレーム・マテジウス、千野栄一訳『マテジウスの英語入門——対照言語学の方法』、1986年6月20日、三省堂、205ページ以降参照。
- 6) Kraus, Jili: *Zu soziolinguistischen Aspekten der Sprachkultur in der*

- Tschechoslowakei*. In: *Grundlagen der Sprachkultur*, Teil 2, (1982), S. 256.
- 7) *Ibid.*, S. 257.
- 8) Vgl. Weise, Günter: *Zum Funktionsbegriff der Prager Linguistenschule*, In: *Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung*, 1978, Heft 6, S. 565.
- 9) Vgl. Kraus, S. 257.
- 10) 例えばプラーク学派の共同執筆である *Allgemeine Grundzüge der Sprachkultur* は *Obecné zásady pro kulturu jazyka*(1932), B. Havránek: *Die Aufgaben der Literatursprache und die Sprachkultur* は *Úkoly spisovného jazyka a jeho kultura* (1932) というように、今日、重要視される論文はチェコ語で書かれたものが圧倒的であった。また、この意味で „*Grundlagen der Sprachkultur*,“ Teil 1 (1976), Teil 2(1982) の刊行は非常に意義深い。そして、1・2 がそれぞれ古典期・第二次世界大戦後のプラーク 学派の活動に相応する。
- 11) 旧 DDR では第 6 回共産党大会 (1972年) で政治局員のハーガー (K. Hager) の発言を契機として言語文化論が研究され始める。したがって極めて政治的であった。詳細は、拙論『プラーク 学派の言語文化論からみたわが国の外国語教育の改善について』, 160ページ以降を参照。
- 12) Vgl. Nüssler, Otto: *Die Gesellschaft für deutsche Sprache*. In: *Sprachkultur*, 1984, Jahrbuch 1984 des Instituts für deutsche Sprache, S. 100-107.
- 13) Weise, S. 565.
- 14) *Ibid.*, S. 566.
- 15) *Thesen des Prager Linguistenkreises zum Internationalen Slawistenkongress*. In: *Grundlagen der Sprachkultur*, Teil 1, S. 43, 原文は次の通り: 1-a: die Auffassung der Sprache als eines funktionalen Systems, また „*Allgemeine Grundzüge der Sprachkultur*“ S. 74-85 をも参照。
- 16) Vgl. Hartig, Matthias: *Angewandte Linguistik des Deutschen* In: *Soziolinguistik*, 1985, Verlag Peter Lang AG. S. 17ff. そこでは „Die deutsche Soziolinguistik ist in einer gewissen Eigenständigkeit erst seit den sechziger Jahren dieses Jahrhunderts zu beobachten.“ と説明される。
- 17) Vgl. *Thesen des Prager Linguistenkreises*, 1929 S. 65. なお拙論『プラーク 学派の言語文化論からみたわが国の外国語教育の改善について』をも参照。

- 18) Ibid., S. 43.
- 19) Weise, S. 560.
- 20) Vgl. Havránek, Bohuslav: *Zum Problem der Norm in der heutigen Sprachwissenschaft und Sprachkultur*. In: *Grundlagen der Sprachkultur*, 1936, Teil 1, S. 143.
- 21) Weisgerber, Leo: *Zum Aufbau der energetischen Sprachbetrachtung*. In: *Wirkendes Wort*, März/April, 1977, S. 73.
- 22) Vgl. Havránek, Bohuslav: *Die Aufgaben der Literatursprache und die Sprachkultur*. In: *Grundlagen der Sprachkultur*, Teil 1, 1932, S. 104.
- 23) 福本喜之助, 寺川央『現代ドイツ意味理論の源流』, 1975年, 大修館書店, 358ページ.
- 24) マテジウス, 205ページ以下参照.
- 25) *Thesen*. S 52.
- 26) Vgl. Vachek, Josef: *Zum Problem der geschriebenen Sprache*. In: *Grundlagen der Sprachkultur*, 1939. Teil 1, S. 229.
- 27) Ibid., S. 230.
- 28) Ibid., S. 230.
- 29) Ibid., S. 232.
- 30) エウジェニオ・コセリウ『言語体系』, 原誠他訳, 1981年5月20日, 三修社, 31ページ以下参照.
- 31) コセリウ, 56ページ以下参照.
- 32) フェルディナン・ド・ソシュール, 小林英夫訳『一般言語学講義』, 1973年, 岩波書店, 34ページ.
- 33) Vachek, S. 231.
- 34) Ibid., S. 233.
- 35) Ibid., S. 235. 原文は次の通り: Sie (die Sprache <la langue>) bezeichnet keine abstrakte, universale Norm, sondern die Summe beider oben besprochenen Normen.
- 36) コセリウ, 78ページ.
- 37) コセリウ, 81ページ.
- 38) Vachek, Josef: *Geschriebene Sprache, Allgemeine Probleme und Probleme des Englischen*, Teil 1, 1973, S. 245-246. 論文は1959年に発表された.
- 39) Vachek, S. 246.
- 40) Ibid., S. 234 f.

- 41) コセリウ, 56-73ページ.
- 42) 時枝誠記『国語問題のために』, 昭和37年, 東京大学出版会, 15ページ.
- 43) 丸谷才一, 大野 晋『日本語の世界』第16巻, 『国語改革を批判する』, 昭和58年, 中央公論社では「国語改革」に対する的確な批判が全編にわたって見られる。われわれの言語文化の将来に警鐘を鳴らす一書であり, 言語意識への啓蒙の著作である.
- 44) この原因は, とりもなおさずかつての当用漢字という制限である。外来語の多用は, これによる語彙の貧困化, レトリックの単純化を補うようにして現れるのである (『国語改革を批判する』, 362ページをも参照).

Über die geschriebene und gesprochene Sprache in der Prager Sprachkultur- und der sprachlichen Norm-Theorie

Kenji SOGO

In dieser Schrift handelt es sich um die gleiche Bedeutung der geschriebenen und gesprochenen Sprache für das sprachliche Leben. Sprache wird nur mündlich und schriftlich realisiert. Also kann man durch akustische und visuelle Formen die Sprache in einer Sprachgemeinschaft erwerben. Daher sollten die beiden Formen in der Sprachgemeinschaft eigentlich als gleich wichtig angesehen werden. Aber man kann wohl sagen, daß die akustische, also mündliche Form der Sprachrealisierung in der Tat wissenschaftlich ausführlicher behandelt wurde als die visuelle, also schriftliche.

Das soll nach dem Schriftsteller Ryotaro Shiba auf der europäischen sprachlichen Tradition beruhen. Schon bei den alten Griechen hat der mündliche Ausdruck eine große Rolle gespielt. Man erinnere sich daran, daß die Leute schon bei den Griechen und Römern ihre Meinungen vor ihrem Publikum auf der Straße logisch und auch mündlich darstellten.

Nach M. Romportl hatten die Sprachforscher erst am Ende des 19. Jahrhunderts Interesse an der gesprochenen Sprache. Sie war als natürliches Wesen für die Sprachforscher der modernen Sprachwissenschaft bedeutsam. Hier kann man die Dichotomie von de Saussure (langue—parole) zu den wichtigen Ergebnissen der modernen Sprachwissenschaft zählen.

Die de Saussuresche Dichotomie (1916) wurde vom amerika-

nischen Strukturalismus, der Kopenhagener glossematischen Schule und der Prager Schule überwunden. Und nicht zuletzt muß man hier die Trichotomie von E. Coseriu anführen. Im Jahr 1952 legte er das Schema: System-Norm-Rede vor, womit man die soziolinguistischen Zusammenhänge unter den Mitgliedern einer Sprachgemeinschaft besser erfassen kann. Aber früher als Coseriu, 1939, entwickelte ein Prager Forscher, ein Überwinder de Saussures, J. Vachek, eine andere trichotomische Theorie. Vielleicht kannte Coseriu bei der Begründung seiner Trichotomie die Arbeit von Vachek nicht.

Wenn man die sprachliche Norm-Theorie recht beurteilen will, kann man solche sprachwissenschaftsgeschichtlichen Ergebnisse nicht außer acht lassen. Bei Vachek werden die geschriebene und die gesprochene Form der Sprache in der gleichen Position des Sprachlebens behandelt, was für die Arbeiten der Prager Schule charakteristisch ist.

Aber meiner Meinung nach ist diese Trichotomie von Vachek etwas unzureichend. Deshalb möchte ich das System einer neuen, weitergehenden Trichotomie aus den beiden Trichotomien von Coseriu und Vachek herausarbeiten.

Zum Schluß möchte ich die Bedeutung der geschriebenen Sprache im Sprachleben in meinem System unterstreichen, wenn die gesprochene Sprache in unserem Sprachleben so vorherrschend ist, daß sie in die geschriebene Form der Sprache eingreift und eindringt. Und dieses System zielt soziolinguistisch darauf ab, die geschriebene Sprache in der Sprachgemeinschaft gleich wie die gesprochene zu pflegen und auszubilden. Der Unterschied der beiden Sprachformen kann die Entwicklung der Sprachkultur auf den richtigen Weg bringen.

Es ist die Sprachkultur-Theorie, die uns das als sprachwissenschaftliche Aufgabe bewußtmacht.